



大量死後の不完全な遺体や遺体の断片という難題

Élisabeth Anstett

► To cite this version:

Élisabeth Anstett. 大量死後の不完全な遺体や遺体の断片という難題. *Tohoku Journal of Religious Studies*, 2023, pp.3-15. <10.50974/00136787>. <halshs-04093929>

HAL Id: halshs-04093929

<https://shs.hal.science/halshs-04093929>

Submitted on 11 May 2023

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

大量死後の不完全な遺体や遺体の断片という難題

著者	Elisabeth Anstett
雑誌名	東北宗教学
号	特集号
ページ	3-15
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.50974/00136787

大量死後の不完全な遺体や遺体の断片という難題¹

Elisabeth Anstett

大量死や災害のエピソードにより、社会は何よりも大量の死体に突如として対処しなくてはいけなくなる。当たり前のように思えるかもしれないが、これは重要な命題である。これらの危機的な状況は、目に見える場所に横たわる遺体の存在がもたらす健康的、心理的、および社会的な問題に対応するための緊急の介入につながる。遺体に対処するための緊急の問題は、1970年代にまで遡る初期の論文（1976年発表の Hershisser and Enrico による論文など）から、エビデミックや自然災害中の遺体管理により提起される社会的・文化的問題について82本の論文の批判的分析を行った。Halina Suwalowska らが2021年に BMJ Global Health より発表したごく最近の論評まで、災害研究の分野において長らく学術的な関心が寄せられてきたテーマである。遺体管理に関連する問題に対する関心は、近年ではジェノサイド研究などの大量死のエピソードにかかわるほかの分野の研究にも及んでおり、急速に多くの重要な論文が生み出されている²。

これらの遺体（特にすぐに埋葬されない遺体）は、単に短期的な問題を提起するだけではない。埋葬されないからこそ、長期的な問いも投げかけているのである。その多くは生きている者と長く共存し、これらの遺体に与えられるステータス、提供される葬儀や埋葬の方法などの複雑な問いに様々な社会が答えなければならない。

したがって、災害に見舞われた社会は、1. 一部の遺体の欠如（ベトナム戦争の両陣営について Sarah Wagner (Wagner, 2019) と Heonik Kwon (Kwon, 2008) が示しているような行方不明であることが遺族や社会に長い間ストレスを与え続ける恐れがある行方不明兵のケースや、Victor Penchaszadeh

1 本文の初版は Cadenza Academic Translations によりフランス語から翻訳され、筆者が最終化させた。

2 Manchester University Press の *Human Remains and Violence* ブックシリーズを参照。

(Penchaszadeh, 2015) がアルゼンチンの事例で示しているように被害者に何世代にもわたり影響し続けているラテンアメリカの強制失踪の被害者のケースなど)、2. 身元が不明な遺体の存在 (タイにおける2004年の津波の被害者の事例について社会人類学者の Claudia Merli と司法人類学者の Trudy Buck が共同で行った研究 (Merli & Buck 2015) で示されているとおり、津波の場合は特に問題となり、遺体の処理に割かれる資源の量について疑問が投げかけられ、その結果法鑑定におけるアイデンティティ政治の問題となっていることが明らかになっている)、3. 部分的な遺体の存在、といった三種類の悩ましい状況に最も頻繁に直面する。本論文ではこのうち三つ目の状況に注目するが、共通の特徴を有し共通の疑問を提起していることから、まずは最初の二つのケースがもたらしている主な共通の問題に軽く触れる。

不在の遺体、行方不明の遺体

どれほど広く搜索を実施しても、大量死を伴うどのような状況においては一部の遺体が発見されないことがある。そのため被害者は (しばらく、または永遠に) 「行方不明」 のままとなり、その失踪は社会にとって大きな問題をもたらす。これらの問題は個人の運命を巡る不確実性や疑念と結びついており、あらゆる文化的・社会的な秩序原則に影響し、社会人類学者の Heath Cabot がギリシャの難民キャンプで実施した研究で示されているように、文脈によっては魂や幽霊、ゾンビなどの媒介者の誕生に繋がる (Cabot, 2016)。そのため、特定の遺体の不在は、(死体が多すぎるという問題に社会が対処しなければならない時にはやや逆説的であるが) 言語、法律、または葬儀などの複数の領域に影響を及ぼすのである。

問題を名づけラベルを貼るという行為は、実のところ常に重要なものである。多くの言語では、様々な形態の失踪に対して、これらの困難な状況に名前を付けるために設計された細かい同義語の語彙をもたらしめている。したがって、遺体が見つからない死者という具体的な被害者のカテゴリーに社会がどのように言及しているかを見ることは、常に意義深い。心理学者 René Kaës と

Muriel Katz-Gilbert がホロコーストやアルメニア人の大量虐殺の子孫を対象に行った研究で明らかになっているように、このような不在、そして世代間の繋がりを持続性の喪失は、集団が持つ非常に象徴的な再生産の原則にも影響する (Kaës 2009; Katz-Gilbert, 2020)。

フランスの法律における「不在 (absent)」という分類など、特定の法的なカテゴリーも失踪に対して形作られている。フランスの民法の語彙では、誰かが「不在」であれば、その人の痕跡がもうなく、亡くなったように見えるもののその遺体が見つかっていないことを意味する。³ これには転覆した船の船員、津波や土砂崩れの直前に目撃された観光客、墜落した飛行機の乗客名簿に載っていた渡航者、または戦闘中に失踪し失踪の原因が分からないまたは目撃者がいない 兵士などが挙げられる。このような独特な形態の不在は、第一に個人がまだ生存している場合にその人の権利を守るために設計された措置を講じ、第二にその受益者が行方不明であるものの生きていると仮定できる期間を遵守することを認めるといった公式な判決を出すことを意図した法的手続きの引き金となる (最長10年間である)。この期間の終わりには、二つ目の法的な判決により行方不明者が法的に「不在」すなわち行方不明および死亡したものとして宣言されるが、これは複数の影響をもたらし、特に遺産の分割や、配偶者が未亡人に、子供が虎児になり特定の年金の対象となるような家族のステータスの変更などに関しては問題となる。そのため、不在の遺体は、法分野において強い主体性を持っているのである。

大量死が発生した場合、様々な宗教的伝統が死体の不在を死亡と同等と見なしており、不在者が本当に死んだと考え、それによって *in absentia* (故人が「不在なまま」) で葬儀を行うことを可能にしている。葬儀習慣に対する不在の直接的な影響は、Brigitte Sion がドイツ、アルゼンチン、カンボジアにおける行方不明の遺体の事例について行った比較研究から明らかになっているように、歪曲的な表現だけでなくイノベーションも伴うような代替的な儀式に一般的に

3 フランス民法第92・112条参照、および民事訴訟法第1062条参照

反映されている。

匿名の遺体、過剰な遺体

あらゆる大量死において見られる二つ目の問題は、身元不明の遺体が存在し続ける点である。どのような災害状況でも、誰も扱い方が分からない遺体が過剰に残る。これらの状況は、Roberto Parra、Sara Zapico、Douglas Ubelaker が最近の総説で分析しているとおり、適切に管理された死者と生存者の交流を通じて苦しむ社会に解決策を提供することを目指す人道的法医学の分野の誕生と急成長に繋がっている（Parra et al. 2020）。

これらの状況において最初に対処すべき問題の一つが、匿名の死体に対する責任の所在という法的なものである。特に被害者が複数の国家、宗教、政治団体、または文化に所属していた場合、どの個人または法人、どの国家または機関がこれらの死体に対する正当な権限を持っているのか？そしてそのような権限はどれだけの間正当であり続けるのか？判明している遺族、友人、相続人がいない場合、だれがこれらの身元不明の遺体について責任を取るべきなのか？

これらの潜在的な解決策はどれも都合の良いものには思えない。法制度に引き継がれるのであれば、死亡が発生した地域が必ずしも優先されるとは限らず、身元不明の遺体は管轄権の問題を引き起こす。政府の行政機関が引き継ぐのであれば、地方、国家、超国家的であろうと、そのような機関の権限の程度に関係して問題が起こる。信仰に基づく組織や宗教団体が引き継ぐ場合は、身元不明の遺体は、対象者の宗教であることを主張する可能性そのものが問題となる。潜在的な政治的所属についても、例えばスペインにおけるフランコ主義の犠牲者が支持した政党のように、身元不明の遺体がコミュニティの代表により引き継がれる場合に同じ問題が起こる。

Mercedes Salado Puerto が発表した最近の論文で述べられているとおり、遺体管理を規定する標準作業手順書やプロトコルの数が増え続け、遺体管理そのものに関与している司法人類学者が表明している懸念が高まりつつあるにもかかわらず、国際法やほとんどの国内法は、これまでこれらの疑問に全面的に取

り組むことができていない (Salado Puerto, 2021)。そのためローカルな状況はお互いに大きく異なり、異なる利害関係者間の力関係を常に明らかにしている。

死体が匿名なままであることによる二つ目の問題は、多くの場合引き取り手のいない遺体の保管と最終的な運命に関係している。Helwar Hernando Figueroa-Salamanca and Claudia Lorena Gómez-Sepúlveda がコロンビアの事例で示しているように、一部の場合では、遺体、遺体の断片、または骨は、死亡時の匿名性が問題を引き起こしたり養子縁組の儀式などの補償行為をもたらすことがあってもすぐに埋葬されてしまう (Figueroa-Salamanca and Gómez-Sepúlveda, 2019)。別の場合では、正式な識別がないこと (特に法的手続きが継続中の場合) によって、匿名の遺体またはその一部が人間であることが認識されていても葬儀による処置を受けることを妨げられる。したがって、これらの遺体は身元が確認され、完全に (社会的に) 人間であるとして認識されるまで保管される。内戦後のベルーを対象に行われた Isaias Rojas-Perez による研究が示しているとおり、これらのケースでは、そのような保管の方法、期間、影響が葬儀にとって問題となるような遅延を引き起こし、それにより喪に服す期間を延期させてしまうことがあり、両方ともかなりの論争的となっている (Rojas-Perez, 2017)。

バラバラになった遺体一人間であるということはどういうことなのか？

大量死が生じた場合によく見られる三つ目の複雑な状況は、不完全な遺体や遺体の断片の存在である。自然災害や事故 (飛行機の墜落など)、爆破を含むテロ行為、大量虐殺やジェノサイドなど、数多くの状況が例として挙げられる。どの状況も、遺族には被害者の遺体の断片しか返還されていないという点が共通している。

これらの遺体の断片は、2つの困難をもたらしている。一つは、返還のタイミングに関するものである。各断片は鑑定され次第返還されるべき (つまり遺体を一個一個返すべき) なのだろうか、それとも、同じ遺体の断片ができるだ

け多く集まってから、一括して返還するのがよいのだろうか（つまり、一回の作業で断片群を返還すべきなのか）？しかし、それではいつまで、あるいはどの時点まで遺体の回収を続ければ良いのだろうか？

返還のタイミングの問題（それはまさに死の儀式を行う可能性に直結する）は、社会人類学者の Jay Aronson が記録した世界貿易センターの瓦礫の整理の際に顕著に生じたが（Aronson, 2016）、ほとんどの飛行機事故や大災害でも同じことが言える。社会・司法人類学者の Admir Jugo と Senem Škulj が記録したように、ボスニアでは、回収と鑑定の手続きを複雑にし長引かせるような二次または三次墓地での死体隠蔽の技術が大量虐殺に伴っており、戦後25年たった今でも問題となっている（Jugo and Škulj, 2015）。この特定の文脈において、国際行方不明者委員会のために働く司法人類学者の中でも特に「ポドリニエ身元確認プロジェクト」に配属された人々は、様々な現場で発見された人骨を確認し、組み立てるという難しい仕事を任されている。遺族には、遺骨を一度に受け取りたいか、それとも遺骨が発見されるたびに受け取りたいかを繰り返し尋ねている。このように、遺体安置にかかる時間が異なるのは、DNA 鑑定が日常的に行われるようになり、遺体の断片を特定できるようになったためである。こうした終わりのない時間枠は、政治学者の Jessica Auchter が最近の論文で強調しているように、埋葬の遅延や繰り返しがもたらす社会的・心理的影響の問題をも提起している（Auchter, 2020）。

二つ目の問題は身元不明なままの断片の法的地位に関するものであり、人間であることが認められていてもすべての遺体を鑑定することは必ずしも可能ではないために生じている。

一方、死体の法的地位は、多くの国家法制度において明示されている論理的な矛盾（法的主体でありそれ故に生きている必要がある「個人」と「死者」の間での矛盾）を維持することでその逆説的な性質を実証し続けている。法学者 Philippe Ducor が強調したように、遺体（遺体の断片）の法的地位はより定義が難しく、多くの点で曖昧であり、権利に服する権利はない、と定義されてい

る (Ducor, 1995)。このような永続的な法的限界は、災害状況における身元不明死体の未来の姿を明らかにするために、法律、生物学、倫理学、社会科学の専門家を交えた学際的議論を呼び起こすものである。

法的手続きを経ない限り、また科学的研究の対象でない限り、遺体は一般的に解剖学的標本とみなされ、病院の廃棄物でなければ考古学的標本に関連するものである。国家が財政的責任も含めた遺体の保管の責任を負わされることを防ぐために、地方や国の管轄区域が、遺体が提起する問題に取り組むことを拒否している例は多い。⁴ したがって、医学、考古学、法的手続きの枠外での遺体の(適切な)最終処分を強制、制限、規定するような手続き的、行政的、国内的、国際的枠組みが不足しているのである。

このような状況は、Henry Giroux が記録したハリケーン・カトリーナの例に見られるように、遺体をただの廃棄物の地位へと下げ、最終的に破壊してしまうことを可能にしている (Giroux, 2006)。遺体は多くの場合、根本的な存在論的な不確実性を示すものであり、物質的に大量に残っている場合に社会にとってさらに不安で法的に宙ぶらりんな状態に陥れている。そのような場合、人として捉えるためにどれだけの量の組織や骨材料が必要であり、最終的にそれをどう扱うべきかという難しい問題に対処することは、相談する専門家(一般的に司法人類学者)と社会の(宗教的、法的、または精神的)代表に委ねられている。

遺体が個性を考慮しなければならない「人」を構成しているといふ(そしていつまで)見なすことができるのだろうか? または、灰、骨の断片、小骨しか残っていないポーランドになるナチスのソビボル強制収容所を発掘した考古学者の言葉を借りると、「人として見なすためにはどれだけの量が必要なのか」?⁵ 主な一神教的な宗教(ユダヤ教、イスラム教、キリスト教)はどれも遺体の断片と人の間に同本質的な繋がりを維持することを決定しており、したがって換

4 例えば、グラグから出てきた遺体を「商業的価値のない考古学的な標本」として指定したロシアの地方検察官の判決を参照。

5 2015年6月にポーランドの考古学者 Anna Zalewska とともに実施したディベートより。

喩（全体の代わりに一部を取り扱うこと）の原則に基づいて儀式を行うことを認めている。

大量死の場合には、断片化、劣化、ラベル付け、目録作成、保管などの法医学的な専門性の影響を統合または対応するために、これらの儀式が独特の形で行われている点を強調することは重要である。これは、1941年のボグロム中にルーマニアのポプリカニの町で殺され、2010年に発見され発掘された数十名のユダヤ人の遺体を2011年4月にヤシで再埋葬した事例に見受けられる。再埋葬は、儀式を行うために米国や英国から訪れたラビの立ち合いの下で行われた。この儀式は完全に宗教的であることが意図され、遺体の断片化と埋葬者の身元確認の不可能性による多大な物質的な制約に適応しつつユダヤ式の葬儀に正式に従うことを目指した。個別の覆いを使わずに（代わりに単一の集団的な覆いを使用して）単一でありながら複数でもある墓が用いられ、遺体は埋葬のために着替えられず、ユダヤ法典の法律であるハラハの基本原則にいくつか反した。専門家らが用いた道具（遺体袋、段ボールやプラスチック製の保管箱、PVCまたは紙袋、ラベルまたはバーコードが貼られた金属またはプラスチック製のタグ）は遺体がこれ以上処置されるのを避けるために葬儀に直接取り込まれていたため、ヤシにおける再埋葬のために行われた決定は、考古学と法医学の実践そのものの著しい社会文化的な影響も強調している。

これまで見てきたように、大量死に関しては、埋葬の習慣はかなり柔軟であるように見え、別の場所から埋葬習慣の要素を統合したり、さらには新しい埋葬方法を発明することにより、（人口統計、政治、文化といった点で）危機的な状況に適応できる。Mary Picone が仏教の礼拝のための便利な像の制作における火葬産物（骨と灰）の象徴的および文化的な使用について行った分析で示されている通り、新たな葬儀習慣には、主に無意味な要素の採用（およびその後の前述したような匿名の遺体の再指名）または再利用や再定義など、様々な象徴的および論理的な原則が関わっている（Picone, 2007）。

したがって、これらの複雑かつ動的な埋葬習慣は、技術段階または死体を安

置する段階（遺体の搜索、発見、および分析を含む）と葬儀段階の間における強力かつ抵抗力の高い繋がりを実証している。また、これらは遺体の（再）出現の瞬間が果たす重要な役割も明らかにしている。骨は永続的な主体性の可能性を維持しているように見える。社会人類学者や考古学者の Cara Krmpotich、Joost Fontein、John Harries らが最初に設計した理論的枠組みのフォローアップとしてエジンバラ大学による学際的な研究ネットワーク *Bones collective*⁶によってそのことについて分析が10年以上続けられている（Krmpotich et al., 2010）。そのため、多くの状況において、（古典的な「葬式」考古学者であろうとより現代的な「法医学」考古学者であろうと）考古学者らは、遺体に取り扱われ長持ちする条件について責任を負うようになる。したがって、考古学者は法医や監察医と同様に多くの観点から、災害状況における葬儀の連鎖における主なアクターとして見なすべきである。

結論

結びとして、スペインの学者 Alfredo Gonzalez-Ruibal の言葉を借りると、「超近代的な考古学」による貢献について考えてみる価値がありそうである（González-Ruibal et al., 2008）。この考古学は、人類の大量破壊という想像を絶する状況に目を向けることに合意している。この考古学は研究者と彼らが掘り出す遺体との関係性について本質的な倫理的問題を提起しているという事実に加えて、Zoe Crossland と Rosemary Joyce がその編著（Crossland & Joyce, 2015）で完璧に示しているとおり、発掘が政治的にも文化的にも常に敏感であり続けてきた状況において、これらの考古学者は彼らが発掘した遺体の返還と再埋葬の段階に参加することが多い。また、この考古学は、歴史家・文化人類学者の Ewa Domanska が強調しているように、遺体の存在論について再考するようにも促している（Domanska, 2005）。我々は、境界にある対象物として理解される死体が、様々な時代や様々な場所において異なった見方をされてき

6 <https://www.sps.ed.ac.uk/research/research-project/bones-collective> を参照。

たことを長らく知っていた。しかし、異なる大量死の例は、同じ社会においてさえ遺体が根本的に対立した見方や慣習の対象にもなりえることを明らかにしており、今後も考察と研究の対象となる要素であり続けることであろう。

参考文献

- ANSTETT, (É.) DREYFUS, (J.-M.) (dir.). *Destruction and human remains: Disposal and concealment in genocide and mass violence*. Manchester: Manchester University Press, 2014. 248 p.
- ANSTETT (E.), DREYFUS (J.-M.) dir. – *Human remains and Identification. Mass violence, genocide and the Forensic Turn*. Manchester: Manchester University Press, 2015. 244p.
- ARONSON, (Jay D.). - *Who Owns the Dead? The Science and Politics of Death at Ground Zero*. Cambridge: Harvard University Press, 2016.
- AUCHTER, Jessica. "Burial, Reburial, and the Securing of Memory." *Interdisciplinary Political Studies* 6.1 (2020): 113-137.
- CABOT, Heath. "'Refugee Voices' Tragedy, Ghosts, and the Anthropology of Not Knowing." *Journal of Contemporary Ethnography* 45.6 (2016): 645-672.
- CROSSLAND (Z.), JOYCE (R. A.) eds. - *Disturbing Bodies. Perspectives on Forensic Anthropology*. Santa Fe: School for Advanced Research Press, 2015, 234pp.
- DOMANSKA (E.). Toward the archaeontology of the dead body. *Rethinking History*, 2005, 9(4): 389-413.
- DUCOR, Philippe. "The Legal Status of Human Materials." *Drake L. Rev.* 44 (1995): 195.
- DUDAY, (H.), COURTAUD, (P.), CRUBEZY, (E.), SELIER, (P.), & TILLIER, (A. M.). - L'Anthropologie «de terrain»: reconnaissance et interprétation des gestes funéraires. *Bulletins et Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris*, 1990 2(3): 29-49.

- DUGUET, Anne-Marie. « Le statut du corps après la mort et le respect de sa dignité ». *La Revue de Médecine Légale*, 2010, vol. 1, no 3, p. 79-80.
- EAAF Argentine Forensic Anthropology Team 2010. *2007-2009 Triannual Report*. Buenos Aires, ed EAAF
- FABER-JONKER (L.), *Le premier génocide du XXe siècle : Herero et Nama dans le Sud-Ouest africain allemand*, Paris : Mémorial de la Shoah, 2017.
- FIGUEROA-SALAMANCA, Helwar Hernando, and Claudia Lorena GÓMEZ-SEPÚLVEDA. "" Let's not forget the dead". Animero and Violence in Puerto Berrío, Antioquia (Colombia)." *CS* 28 (2019): 125-151.
- GIROUX, Henry A. "Reading Hurricane Katrina: Race, class, and the biopolitics of disposability." *College Literature* (2006): 171-196.
- GONZALEZ-RUIBAL, (A.), EDENSOR, (T.), FUNARI, (P. P. A.), HALL, (M.), HOLTORF, (C.), LEONE, (M. P.), ZARANKIN, (A.). - Time to destroy: An archaeology of supermodernity. *Current Anthropology*, 2008, 49(2), 247-279.
- HARRISON, (S.). - *Dark trophies: hunting and the enemy body in modern war*. London/N.Y.: Berghahn Books, 2012.
- HERSHISER, Marvin R. et QUARANTELLI, Enrico L. The handling of the dead in a disaster. *OMEGA-Journal of Death and Dying*, 1976, vol. 7, no 3, p. 195-208.
- JUGO, Admir, and Senem ŠKULJ. "Ghosts of the past: The competing agendas of forensic work in identifying the missing across Bosnia and Herzegovina." *Human Remains and Violence: An Interdisciplinary Journal* 1.1 (2015): 39-56.
- KAËS, René, Le travail de l'intersubjectivité et la polyphonie du récit dans l'élaboration de l'expérience traumatique. In A. et J. Altounian (dir.), *Mémoire du génocide arménien : héritage traumatique et travail analytique*, Paris, Presses Universitaires de France (2009) : 209-235.
- KATZ-GILBERT, Muriel. "De l'absence de traces à la trace des absents. Penser la restauration des contrats narcissique après un crime de masse avec René Kaës

- et Paul Ricœur." *Cahiers de psychologie clinique*, 1 (2020): 37-74.
- KORMAN, (R.). – L'Etat rwandais et la mémoire du génocide. Commémorer sur les ruines (1994-1996). *Vingtième siècle, revue d'Histoire*, n°122 avril-juin 2014, p.87-98.
- KRMPOTICH, Cara, FONTEIN, Joost, et HARRIES, John. The substance of bones: the emotive materiality and affective presence of human remains. *Journal of material culture*, 2010, vol. 15, no 4, p. 371-384.
- KWON, Heonik, *Ghosts of War in Vietnam*, Cambridge University Press, 2008.
- MERLI, Claudia et BUCK, Trudi. Forensic identification and identity politics in 2004 post-tsunami Thailand: negotiating dissolving boundaries. *Human Remains and Violence: An Interdisciplinary Journal*, 2015, vol. 1, no 1, p. 3-22.
- PENCHASZADEH, Victor B. Ethical, legal and social issues in restoring genetic identity after forced disappearance and suppression of identity in Argentina. *Journal of community genetics*, 2015, vol. 6, no 3, p. 207-213.
- PICONE, Mary. Cremation in Japan: Bone Buddhas and surrogate bodies. *Etudes sur la mort*, 2007, no 2, p. 131-140.
- PLATT, (T.) Bitter legacies: A war of extermination, grave looting, and culture wars in the American West, in *Human remains and identification. Mass violence, genocide, and the 'forensic turn'*, ANSTETT (E.), Dreyfus (J.-M.) (dir.), Manchester: Manchester University Press, 2015, pp 14-33.
- RAIMBAULT, Philippe. « Le corps humain après la mort. Quand les juristes jouent au «cadavre exquis».... » *Droit et société*, 2005, no 3, p. 817-844.
- ROSENBLATT, (A.) – *Digging for the Disappeared. Forensic Science after Atrocity*. Stanford: Stanford University Press, 2011. 278p.
- ROJAS-PEREZ, Isaias. *Mourning Remains: State Atrocity, Exhumations, and Governing the Disappeared in Peru's Postwar Andes*. Stanford, CA: Stanford University Press, 2017
- SALADO PUERTO Mercedes, ABOUD, Denise, BARAYBAR, Jose Pablo, et al.

The search process: Integrating the investigation and identification of missing and unidentified persons. *Forensic Science International: Synergy* 3, 100154. 2021.

SION, Brigitte. Missing Bodies, Conflicted Rituals: Performing Memory in Germany, Argentina, and Cambodia. In Andrea Bieler, Christian Bingel and Hans-Martin Gutmann (eds.) *After Violence. Religion, Trauma and Reconciliation*, Leipzig, EVANGELISCHE VERLAGSANSTALT, 2011, p. 61-81.

SHIGWEDHA (V. A.), “The return of Herero and Nama bones from Germany: the victims' struggle for recognition and recurring genocide memories in Namibia”, in *Human remains in society. Curation and exhibition in the aftermath of genocide and mass-violence*, DREYFUS (J.-M), ANSTETT (E.), Manchester: Manchester University Press, 2016, p. 197-219.

SUWALOWSKA, Halina, AMARA, Fatu, ROBERTS, Nia, et KINGORI, Patricia. Ethical and sociocultural challenges in managing dead bodies during epidemics and natural disasters. *BMJ global health*, 2021, vol. 6, no 11, p. e006345.

THOMAS (L.-V.) – *Anthropologie de la mort*. Paris: Payot, 1975. 540 p.

WAGNER (S.). - *To Know Where He Lies: DNA Technology and the Search for Srebrenica's Missing*. Berkeley: University of California Press, 2008.

WAGNER, Sarah, *What Remains: Bringing America's Missing Home from the Vietnam War*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2019.